

シルクで海外バイヤーを魅了

カンボジア、ラオスの有力シヨップ

伝統的な絹織物が脈々と受け継がれているカンボジア、ラオス。シルクといえばタイシルクが知られるが、カンボジア、ラオスも負けてはいない。画国にはシルクをふんだんに使った商品が披露する有力店が点在する。欧州の雰囲気も漂わせていることもあって、魅了される海外バイヤーも多い。

カンボジアの首都プノンペン。外国人観光客でにぎわうシリロット・キーから程近い場所にあるセント・サシルク。ウエア、ホームウェア、雑貨のほとんどがカンボジアシルク製だ。04年2月に開業。販売1人、生産2人のスタートだったが、今は70人が生産に携わるほどの成長を遂げた。オーナー兼デザイナーのセーさんは「カンボジアシルクはすべて手仕事。丁寧な物作りが海外から評価を

れている」と語る。米、仏、英国からのオーダーが多いが、日本への関心も高まる。アンコールワットの玄關口、シェムリアップで多くのツアーリストを引き寄せるのが、アルチサン・タンコール。ウエアは香港、スカート、アクセサリーは仏と海外デザイナーを起用し、ディスプレイにもこだわり。店には各国の観光客が列を作り、「カンボジア最大のハンドクラフトシヨップ」と言われるもの

らなっている。市内にはシルクファームと呼ぶ絹織物工場も持ち、シェムリアップから世界に向けて発信している。織細さと完成度の高さで知られるラオスの絹織物。首都ビエンチャンにはラオスを代表する店がある。その一つがペンマイキヤワリーだ。ラオスには母から娘へ織物技術を伝承する習慣があるが、家族経営のペンマイキヤワリーも伝統的な織物技術を生かしている。ラオスの絹織



物の特徴を「柄がすごく細かい」と語るニコン・ハンチヤクワフトは絶対にできない。手仕事でなければ」と付け加える。ビエンチャン市内に2つの店、ルアンバタンでは8月所でゴット展開しているが、海外で最大のマーケットは日本だ。一番人気はショートスカート。「ここまで成長したのはお客様のおかげ。お客様を先生と看做して、商品作りに生かしてきた」と、伝統的な技術を重視しながらも、新たな感性を結び付けている。

は、常に新たな手作業を続ける店だ。オーナーのニコさん「自分の作りたいものを作った」のがスタートで、02年の創業。ラオスのシルクやコットンを使ったバッグ、スカートなどは海外バイヤーからも評価が高い。海外に店を出すことは考えていないが、「日本にはとても風味を持っている。日本の方と一緒にアイデアをシェアしたい」と語る。商品はすべてハンドクラフト。「仮に大量のオーダーが来ても、機械を使うのではなく、オーダーをコントロールする」。これからも「ラオスの伝統に新たなアイデアを加え、新しいコレクションを披露したい」と意欲的だ。

カンボジア、ラオスの有力店に共通するのは、伝統的な手織りの技術に、新たな雰囲気をつづらしていることだ。特に色、柄などで、欧州のテイストがどこかに感じられることが多い。「タイシルクは日本でも知られていないが、魅力的な要素はたくさんある」という声も少なくない。

伝統技術と新たな感性を融合



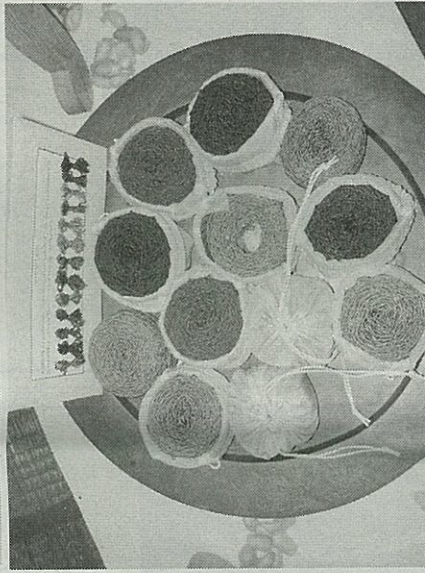
店内に豊富に揃えるさまざまなシル(セント・サシルク)



ディスプレイにもこだわり(アルチサン・タンコール)



店の隣には工房も(ペンマイキヤワリー)



素材開発にも熱心(ニコン・ハンチヤクワフト)